

富良野演劇工場運営委員会（平成 28 年度第 1 回）顛末

日 時 平成 29 年 3 月 22 日（水） 午前 10 時～11 時

場 所 文化会館 研修室

出席者 委員：5 名、演劇工房：2 名、事務局：3 名

■ 報告事項 ～進行は天日委員長

（1）平成 27 年度富良野演劇工場指定管理について

原田委員：次年度の開催時期を 6 月中旬に開催していただきたい。改正案を早めに出せると思う。29 年度に向けて進めていくのが筋である。

（2）～（5）平成 27 年度収支決算～団体利用日数について

太田事務局長：50 万円の赤字になっているが、自主事業を含めて全体で運営過去の黒字決算を資産に、大きな芝居を 3 本呼んでおり赤字となっている。補助金は赤字の一部補てんであり、黒字になってはいけない。入場者数は増えており、ふらのグループの公演による。ピアノ発表会、ワークショップが増えている。富良野演劇祭は参加校が年々増えている。

原田委員：24 年度から比較して利用団体の裾野が広がり増えており、波及効果としてある。

演劇祭は児童数が減っていき、大変でしょうが続けていただきたい。

太田事務局長：大規模校の富良野小が復活してくれたのが大きい。また、コミュニケーション事業でふらのグループ OB がすべての学校に行っている。

南委員：布部小は全校で参加し、低学年からしゃべれる経験が生きて、コミュニケーション能力が上がっている。

太田事務局長：演劇祭の参加校が増えても断れない。3 日間では無理で 4 日必要になってくる。

天日委員長：こども未来フォーラムでもコミュニケーション能力が上がっており、工場を活用していただきたい。

太田事務局長：28 年度は赤字予想が 27 年より大きい、貯金が目的ではないので、3 年間赤字でも良いものを呼びたい。ふらのグループの公演は「走る」で終わり、ロングランはなくなったときどうするのかで、地元の芸術をこの期間に作っていく。

30 年度からは我々で芝居をつくり発信する。倉本さんも何らかの関わりを持つと思うが、地元でつくり自主的な安定した経営を図っていきたい。

原田委員：29年度から役者は地方にちらばっていくということか。

太田事務局長：講演だけでなくワークショップ、富良野高校講師、富良野舞台塾講演などを「やっている。

原田委員：ふらのグループが解散されるのでは、決算状況、活動状況を広報で市民に知らせていかないと、演劇工場が必要ではないのではないかとになってしまう。文化を市長部局に移管した意義、ふらのグループの人がどう生活しているのか、どうやったら定住してくれるのか、市民に伝えていかないといけない。

瀬川理事長：最近補助金を得て演劇を提供する場合、他市町村との広域連携が求められており、他町村と関わりがないと手を挙げられない。演劇工房は製作会社が這いあらくなくても自主的にできる全国でも数の少ない団体であるので、倉本を引き継ぎ富良野を全国に発信していきたい。

山口委員：演劇祭は富良野だけの取り組み、沿線を含めてオールふらのでやるべき。音楽祭もやると分野が広がる。コミュニケーションを多くあれば誰とでも話ができる。

原田委員：大御所いると遠慮がある。グループの中にアイデアを貯めているので、若い人に期待をしたい。

瀬川理事長：可能性は否定せず試してみたい。作って発信、簡単ではないがどこかでスタートしたい。

原田委員：市民は努力を見ている。どこで行動されるのか、29年、30年が分かれ目。

坂本委員：演劇工場にとにかく行くこと、会員、ボランティアなどで顔を出して、来てくれてふれあってくれると、顔なじみになり見えてくる。それが市民の努め。

瀬川理事長：市民、市の後押し、市民との交流があって、工場職員も日々仕事に当たっている。これからも前進していきたい。